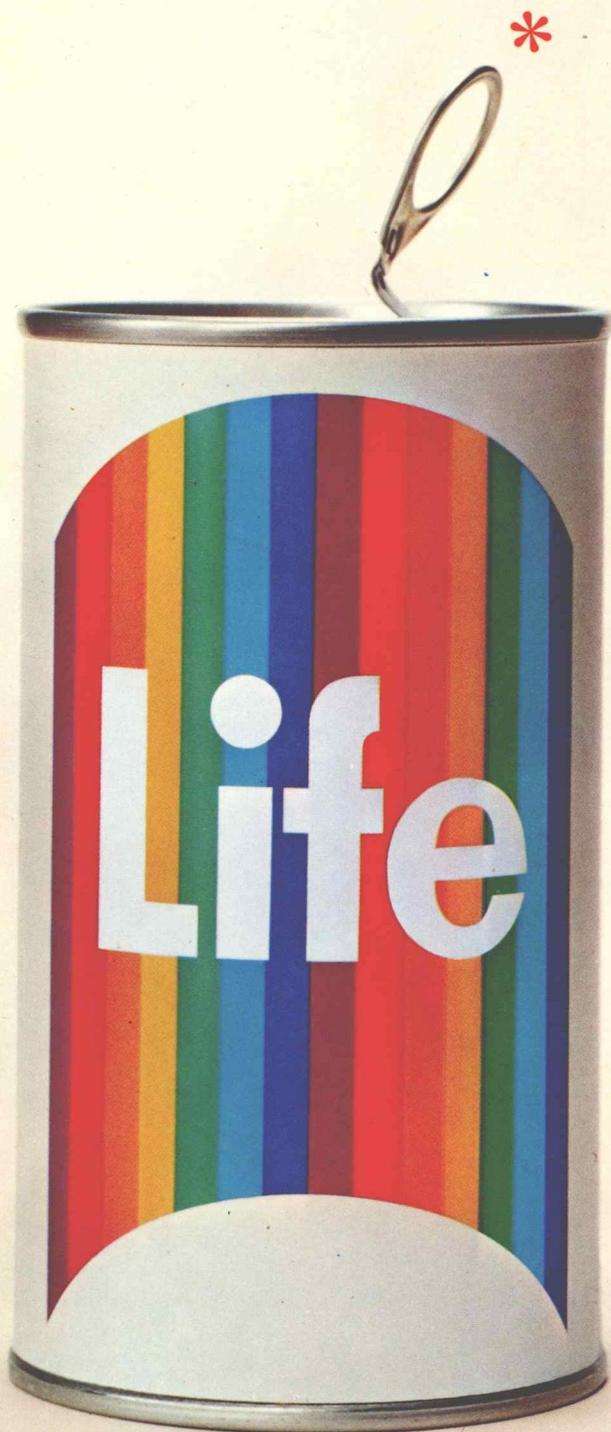


San-ai

'70-10

三愛会会誌No.65 特集：生きがい



よりひろい愛を求めて

人間としての生きがい

安本美典

<産業能率短期大学助教授>

「生きがい」と「死にがい」

いま、曾野綾子さんの『誰のために愛するか』（青春出版社刊）がよく読まれている。『図書新聞』の「今週のベストセラーズ」の欄をみると、この数週間、しばしば、ベストセラーズの第1位をしめている。

『誰のために愛するか』の「はじめに」で曾野さんは、つぎのようにのべている。

「愛の定義を私はこういうふうを考える。その人のために死ぬるか、どうか、ということである。」

「愛している男、あるいは女、のために死ぬるかどうか。それは、私たちにとってひとつの踏絵だ。

しかし、その人のためなら死ぬると思う相手は、ごく少ない。その他の人たちを、私たちは、愛していないのだろうか。そう考えたら絶望的になる。」

たしかに、「生きがい」というものは、どこかで、深く、「死にがい」と結びついている。人は、しばしば、死んでもよいと思われる「対象」を見いだしたとき、もっとも深い「生きがい」を感じずる。

人に、死んでもよいという気持ちをいだかせる「対象」は、もちろん、個人に対する「愛」だけではない。「仕事」であることもあれば、宗教的

な「愛」であることもあり、「主義」とか、「国家」とか、「理想」とかの、抽象的なものであることもある。

思ひまさりて深きもの

かならず先き立ちて死ぬ

鴨長明の『方丈記』は、いまから、800年ほどまえに書かれた随筆文学である。私たちは、学校では、『方丈記』のなかの、「ひぐらしの声、耳に満てり。」などの、隠遁生活を叙述した部分しか、ならわないことが多い。

しかし、『方丈記』では、当時のわが国をおそったあいつぐ大火、大風、洪水、大地震、飢饉などのありさまを、リアリスティックにえがいた部分が、かなりな部分をしめている。

「築地つひじのあたり、道のほとりに飢えて死ぬ人は、数も知れないほどであり」、仁和寺にんなの隆暁というお坊さんが、それを悲しんで、行きだおれの人の額に、「阿」という文字を書いて、仏縁を結んでいったところ、4月と5月の2カ月、都の一部分について行なっただけで、その数が、4万2～3千に達したという。

その叙述のなかで、心をうたれるのは、さりげなく書かれている、つぎのような文章である。

「愛している妻、あるいは、夫をもった人は、その愛情の深い方が、かならず、先に死んで行きました。それは、なぜかといえば、自分はあ

とにして、相手をいたわしいと思うので、たまたま得た食べ物を、愛している人にゆずるからでした。ですから、親子のばあいは、きまったように、親が、先に死んで行きました。また、母の命がつきたのもしらずに、幼い子が、なお、乳をすいながら臥せているのなどもありました。」

何百年たっても、変わらないのは、人の心のようである。愛している人が生きのこるのをみて、「生きがい」というよりも、「死にがい」をどこかに感じながら、目をとじて行く人たち。まことに、愛しうる対象をもちえた人は、しあわせである。

人みなシメールを負えり

「自分をこえるもの」「自分以上のもの」を、心のなかにつかみ、そのために、自分の肉体が減びるのもいとわない。肉体の欲望よりも強い、そのような心のはたらきは、また、ある一面では、深く、人間の業とも結びついている。

私たちが、ひとりひとりの人間をとれば、人間は、利己に満ちたものである。しかし、また人間は、「自分以上の存在」に、よく殉じうるものである。戦時中、「国のため」という理念に殉じて、いかに多くの若ものたちが死んでいったことか。またマルクス主義という理念に殉じて、いかに多くの若ものたちが、蜂起したことか。

「悪の華」によって知られるフランスの詩人、ボードレーは、うたっている。「人みなシメールを負えり。」と。シメールは、火を噴く野獣である。人は、みな、シメールを負っているであろう。シメールは、「愛」であるかもしれない。「理想」であるかもしれない。「仕事」であるかもしれない。シメールは、私たちにおおいかぶさって、大きな二つの爪で、胸にしがみついている。そして、私たちは、それが、どんなに残酷に吸血するとしても、それを、手ばなすことはできない。

語らざれば、憂いなきに似たり

以前、ちょうど、私の妻の妊娠中に、ひっこしをしたことがあった。やむをえず、家政婦の人にきてもらい、手伝ってもらった。かりに、その人を、Aさんとしておこう。Aさんは、じつにほがらかな人で、よく気がつき、てきばきと仕事を片づけてくれたので、非常に助かった。お茶の時間に、きくともなく、Aさんの身の上ばなしをきいた。Aさんは、つぎのような話をした。

「主人は、タクシーの運転手をしています。子供は、男の子が、今年五つになります。生まれたときから、脳性麻痺で、ずっと、病院に、入院したままです。体も、頭もだめなようですけど、どんなにしてでも、大きくしようと、お父ちゃん（御主人のこと）と話しあっています。」

作家、芥川竜之介は、つぎのような古語を好んだという。

君、看よ。双眼の色。

語らざれば、憂いなきに似たり。

「あなた、ごらんなきい。あの人のひとみの色を。あの人は、自分のことを語らないから、憂いを、知らない人のようにみえます。しかし、もっと、もっと、あの人のひとみをよくみてごらんなきい。この世の悲しみと苦しみを知りつくした深い影が、あの人の二つのひとみの底に、たたえられているのに、あなたは、気がつくでしょう。」

この古語は、おそらく、このような意味であろう。

Aさんは、ふつうの人以上に、ほがらかなので、ほんとうに、「語らざれば、憂いなき」にみえた。しかし、そのほがらかさは、悲しみの底を、つきぬけたほがらかさであった。

万葉歌人、山上憶良は「妻子見れば、めぐし愛し」とうたい、「瓜を食べても、栗をたべても、子どもたちのことが思われる」（瓜食めば、子等

おもほゆ。粟食めば、ましてしのはゆ)とうたい、さらに、「兎等うとらを思おもう歌」のなかで、つぎのようにもうたっている。

術すべも無く苦しくるしくあれば出で走り
去いななど思おもへど兎うとららに障さやりぬ

もう手のうちようもない。どうすることもできない。苦しい。ああ、もう、はしり去って、死んでしまいたい。しかし、子どもたちをみれば、それもできない。自分が死ねば、子どもたちは、もっと不幸になる。――

「死」ということにさえも、そしてまた、「死」よりも、もっと大きな苦しみにさえも、耐えさせる「愛」とは、なんであろうか。



「生きがい」を感じることのこわさ

「自分以上の存在」に殉じうる心のはたらきは、たしかに、この世に、さまじまの美しいもの、価値あるものをもたらした。「芸術」も、「宗教」も、「科学」も、「進歩」も、そのような心のはたらきによってもたらされたものが多い。たびかさなる飢饉や、疫病や、戦争にもかかわらず、私たちが、現在の繁栄を目にすることができるのは、私たちの祖先の、「子供たちのためには、死んでもよい」とする心情のつきかさねによってである。

しかし、私はまた、「自分以上の存在」に殉じうる心のはたらきに、ある種のこわさを感じる。そのような心のはたらきが、一方では、多くの惨禍と、争いともたらしたことも事実だからであ

る。

「国家」という「自分以上の存在」に殉じうる心は、しばしば、他国の人々を、大規模に殺戮した。それが、純粹であり、死を賭したものであるだけに、その惨禍も大きい。子どもへの「愛」のために、自分をそこなうばかりか、他の人をもそこなう親は、いつの時代でもすくなくない。「創造」や「科学的研究」や与えられた「仕事」に生きがいを感じ、そこに命をかけるほどの努力を行なったが、そこで生みだされたものが、兵器であり、人を大量に抹殺するものであることもありうる。

ある「宗教」を普及させるために、命を捨てた

人はすくなくない。しかし、その「宗教」が、その宗教を信ずるがゆえに、他の宗教を信ずる人々にたいして、残酷な迫害を加えた例も、すくなくない。自分たちが、正しいと信じて行なう残酷は、悪いと知りながら行なう残酷よりも、しばしば、もっと残酷である。

自分の命をすててもよいとする心が、他の人の命をも、酷薄にやぶり、そこなうのである。

先日、『諸君』という雑誌を読んでいたら、「6・15をめざすウーマンパワー」という座談会記事がのっていた。それは、民青、全共闘、民社学同、日学同、勝共連合と、極左から極右までの、女性活動家があつまって、赤い論戦をくりひろげているものであった。私は、そのなかにあった、つぎのようなやりとりを読んで、なにか、ヒヤリとす

るものを感じた。

A (勝共連合の人らしい) 「じゃ、あなたが考えていることに反対する人は人格として認められないわけ?」

B (全共闘の人らしい) 「だって、これも正しいあれも正しい、これも人格だ、あれも人格だって、どうして認められるわけ?」

さまざまの個性をもった人があり、さまざまの考えがあり、さまざまの資質があるからこそ、社会の進歩もあったのである。しかし、ひとたび、「自分以上の存在」に殉ずる心をもった人は、しばしば、他の価値、他の個性、他の考え方が、わからなくなる。

「主義」に殉ずる心のなかには、あるいみで、純粹で、美しいものがある。しかし、そこには、他の価値をみとめず、他を抹殺してもよいとする、独善的なもの、狹量なもの、なにか、こわさを感じさせるものがある。

私の友だちで、中国文学を専攻した人で、しょっちゅう、「あれも、これも、みんなよいでしょう。」といて、ニコニコしている人がいる。話していると、なにか、救いを感じる。

個人に対する「愛」にしても、「国家」に対する愛にしても、「主義」とか「理想」とかいはれるものにしても、それらは、根本的には、「自分以上の存在」として、私たちの心のなかに、つくられたものである。第三者からみれば、あるいは、一定の時間がたってからみれば、はたして、そのために、命をなげだすほどの価値があったかどうか、疑問のばあいがありうる。それに価値を与えているのは、本質的には、私たちの主観である。

どこかに、それは、信仰に近いものがある。

「生きがい」についての反省を

このようにみえてくるとき、みずからの「生きがい」については、ある種の知恵、あるいは、反省が必要であるように思われる。

人間は、つねに、なんらかの意味で、「自分以上の存在」を求めているものであり、自分たちが生きていることの意味を知りたいと願っている。

「自分以上の存在」を感じることなしに、たしかに、「生きがい」もないかも知れない。

しかし、行為の動機が、主観的に「善」ではあったとしても、あるいは、「純粹」であったとしても、それは、ある種の「美」的な要素はふくんでいても、反省のないばあいは、大変な、はた迷惑をおよぼすことがある。「自分以上のものを信じて」なにかを行なうばあい、すくなくとも、以下にのべる三つのことていどの反省、前提、心がまえといったものが、必要であろう。

他の立場をみとめること

まず、第一に、自分は、自分が正しいと信じた「自分以上の存在」に命をかけるとしても、それは、まず、自己を律するものであり、他の人は、その個性、能力にしたがって、さまざまの考え方、価値観、信条をもちうるものであることを認めること。

生物学的にみれば、人類の長い歴史のあいだに、人類をおそった種々の環境によって、さまざまな能力が、人類のうちにたくわえられたのであろう。その時代がもたらす環境によって、それらの能力のうち、あるものの花がひらく。しかし、その時代に沈黙を守る才能も、けっして、無意味なわけではなく、人類のうちに貯えつつけられて、やがて、別の時代に開花する。

巫女や神の力によって、未来を予知する力があると信じられたものは、ある時代には、いちじるしい力をもちえたが、現代の科学は、それらの人人を沈黙させている。逆に、ガリレオや、コペルニクスなど、現代の眼からみれば、きわめて妥当な、合理的な考え方をした人びとが、その時代には、うけいれられなかった。

たとえば、それが、その時代の多くの人々にうけ

いれられた「思想」であったとしても、その「思想」をうけいれない人々の立場も、保障されなければならない。正しいと思われる「思想」も、社会環境によって、変わって行くものである。個人の精神の自由は、保障される必要がある。

血族結婚を重ねた家系が、純粋ではあっても、滅びやすいように、あまりに純粋な一つの「思想」によって統一され、他の可能性の存在をうちにふくまない社会は、ある環境には適応しえても、社会の生産力が変わり、社会の環境が変わったばあいには、適応しにくくなり、かえってもろく、滅びやすい面がある。

このようにみえてくるとき、多くの立場があるということは、喜ぶべきことでこそあれ、批難すべきことではない。

「愛」に執せず「信」に執せず

第二に、「愛」にも「信」にも、執しないこと。
親鸞しんらんは、歎異抄のなかでのべている。

「この世で、いかに、いとおいしい、可哀かあいそうだとおもっても、おもったとおり助けることはできないから、この慈悲は徹底しない。だから、念仏することだけが、最後までつらぬき通した大慈悲心であるはずだ。」

子どもを、どんなにかわいいと思っても、恋人を、どんなにいとおいしいと思っても、どうすることもできない、人間の運命というものがある。別れがたいと思うものと、別れなければならないことがある。去りがたいと思うものを、手ばなさなければならないことがある。「愛」が、どこまでも貫徹されるものでもなければ、「信」がどこまでも貫徹されるものでもない。「愛」に執すれば、盲愛となり、「信」に執すれば、盲信となる。

大乘仏教を宣揚した竜樹は、有無の執、肯定、否定の執をさることを説いた。

「愛」にしても、「信念」にしても、それを、心のなかにもちながらも、一度は、それを、心か

らはなしてみる必要がある。

それらが、みずからの生きがいであるならば、自分のなすべきつとめを、ただ黙々と行なうべきである。それは、他の人にすすめることはできても、おしつけることはできない。自分に強制することはできても、他の人に強制することはできない。最善の努力はするにしても、それがなるかならないかは、なにか、大きなものにまかせたような、祈りにもにた気持が必要であろう。

よりひろい「愛」へ

そして、第三に、肉親や恋人にたいする個人的な偏愛が、しばしば、人と人とのあらいをもたらし、国家にたいする愛が、しばしば、国家間の闘争をもたらし、人類愛といったものが、しばしば、人類という生物のエゴにねざした自然破壊をもたらししているということ自体に対する反省が必要であろう。

これにたいしては、私は、最終的には、なにか、東洋的な普遍的な愛、自然に対してさえも、闘争よりも、愛をおもう、宇宙にたいする愛とでもいったものが、基盤として必要なのではないかと思っている。

そのようなものの地盤に立っていないとき個人にたいする「愛」も、「仕事」にたいする「愛」も、あるいは、「国家」にたいする「愛」も、「主義」も「宗教」も、「生きがい」を感じ、命をかけるほどの信念をもって行なって、なお、他をそこない、他を破壊する危険性があると思うのである。

以上をまとめるならば、私たちに、「生きがい」を与えるものは、諸刃もろほの刃やいばのようなどころがある。それは、自分自身に、「生きがい」と「死にがい」とを与える反面、他を生かすとともに、他を傷つけ、破壊する可能性をふくんでいる。まず、必要なのは、「生きがい」そのものについての反省であると思うのである。